

2025年度 一般選抜試験 出題の意図

国 語

高校の授業内容が十分に身につけているか、大学入学後の勉学を進めるために必要な国語力があるかを見ることを目的とした出題を行っている。前期3日程、後期日程とも大問3題の出題構成とし、大問1・大問2は論理的文章を題材とした読解問題、また大問3は漢字問題とした。

大問1・2での作問にあたっては、文章読解力をさまざまな視点から見るよう意図した。大問1・2のうち1題は、傍線部の内容説明問題や理由説明問題、また内容合致問題を中心とした構成で、文章の趣旨を把握する力を測る狙いがある。もう1題は空欄補充問題にウエイトを置き、前後の文脈把握力を測ることを狙いとしている。いずれの大問も、新書や文庫を題材としており、専門的で難解な文章というわけではない。新聞や新書などに日ごろから親しんでいれば十分理解できる難易度での出題を意図している。

大問3は漢字の問題を5題出題した。すべてカタカナを漢字になおしたうえで照合する必要がある、その過程を通じて1行の短い文で使われている熟語の意味を正しく理解できているかを見る狙いがある。

※各問題の詳細は、一般選抜前期日程（2月7日実施、2月8日実施、2月9日実施）、一般選抜後期日程の内容を記載しております。

英 語

第1問～第3問は、本試験における読解力評価の中核となる設問であり、いずれも長文読解形式で構成している。語彙、空所補充、内容一致などの設問を通して、標準的な語彙・文法の理解を前提に、文脈や論理の流れを踏まえながら本文内容を細部まで正確に読み取る力を問うている。

第4問～第6問は、文法・語彙・整序英作文を中心とした基礎的言語運用力を測る設問である。空所を含む文の構造を的確に把握し、知識に基づいて適切な表現を判断する力を問う構成としている。

本試験では、多様な形式を通して読解力・語彙力・文法力がバランスよく身につけているかを総合的かつ多面的に測定し、受験者が大学での学修に必要な英語力の基盤を有しているかを確認することを意図している。

※各問題の詳細は、一般選抜前期日程（2月7日実施、2月8日実施、2月9日実施）、一般選抜後期日程の内容を記載しております。

公共、政治・経済

現代社会に関わる具体的な事例や制度を題材とするリード文を読み、空欄補充問題に加えて文章の正誤判断問題を通じて、教科書レベルの基礎知識から応用的な理解力までを総合的に測る出題とした。法・政治・経済の各分野からバランスよく出題し、制度や仕組みの理解にとどまらず、それらが現代社会でどのような役割を果たし、どのような課題を抱えているかを考察する力を問う構成としている。知識を現実社会の諸問題と結びつけ、構造的に捉える姿勢を評価することを意図した。

第1問は、日本の刑事司法を中心に、身体的自由や適正手続の保障といった人権規定が、具体的な制度としてどのように運用されているかを問うた。裁判員制度や司法取引を題材とし、人権に関する理解に限らず、実際の司法制度の仕組みと課題を結びつけて理解できているかを重視している。

第2問は、株式会社の仕組みを基礎に、企業の社会的責任（CSR）やコーポレート・ガバナンスを取り上げた。企業活動を利潤追求のみで捉えるのではなく、株主・従業員・社会との関係を踏まえ、現代経済における企業の役割と責任を制度的に理解できているかを問う構成とした。

第3問は、日本の財政赤字や国債発行、プライマリー・バランスといった財政運営上の課題を扱った。財政用語の暗記だけでなく、歳出・歳入の構造や将来世代への影響を踏まえ、財政の持続可能性という観点から国家運営を考察できているかを問うことを意図した。

第4問は、日本の選挙の基本原則や、衆議院における小選挙区制と比例代表制を組み合わせた選挙制度の仕組みを中心に出题した。制度の名称や仕組みを覚えているかだけでなく、民意の反映や代表制のあり方といった観点から、選挙制度の意義と課題を理解し、民主政治の仕組みを構造的に捉えられているかを重視している。

※各問題の詳細は、一般選抜前期日程（2月7日実施）の内容を具体例として記載しております。

日本史

この試験問題では4つの大問をそれぞれ原始・古代、中世、近世、近現代にあてる構成をとり、また設問の大半を基礎的な語句問題にあてている。これは基礎～標準レベルの知識を幅広く身につけているか否かを問うことを意図したものである。一方で問題文は「教科書そのまま」ではなく現在の学術的水準も意識した筆致とし、設問の一部はそのなかに設けた空欄を補充させるかたちをとっている。これは本文読解作業をとおして、試験の場が歴史的知識・理解の再確認と定着の場となることをも意図したものである。また適宜史料問題も設けることで、知識を単なる断片としてではなく、史料が示す歴史的な文脈にむすびつけた歴史的な理解ができているか否かの測定も試みている。

第1問は平安時代の文化史について基礎的知識を問うとともに、それが国際環境の変化に即した歴史的な文脈のなかにあることについての理解力を測定している。

第2問は承久の乱とそれを経て確立する執権政治について基礎的知識を問うとともに、それを援用して史料を読解することができるかを測定している。

第3問は江戸時代における多様な産業の形成・展開について、用語補充・用語記述問題による基礎的知識の確認とともに、選択式ながら事象の理由・背景を問う問題も設けることで、知識を断片に終わらせぬ総合的把握ができているかを測定している。

第4問は身分制度の近代における変化とその後の展開について基礎的知識を問うとともに、問題文ではその政治・経済との相互連関を示しつつそれに関する問題も設けることで、歴史的な事象の総合的理解力を測定している。

※各問題の詳細は、一般選抜前期日程（2月7日実施）の内容を具体例として記載しております。

世界史

特定の国・地域の歴史を題材とするリード文を読み、空欄補充問題や正誤判定問題を通じて、基礎知識から応用的な理解力までを総合的に測る出題とした。特にリード文中の空欄補充問題を重視し、一問一答的な知識ではなく、文脈の中で用語を適切に理解しているかを評価している。また、リード文中の時代・地域に限定せず、他地域や後世への影響・関連性にも目を向けてもらうことで、歴史を構造的に捉える力を問う設問を取り入れた。

第1問は、近世の科学革命から近代哲学・国際法の成立に至る過程を扱い、観察・実験などの科学的方法の確立が、人間の自然認識や思考様式をどのように変化させたかを問うた。科学史と思想史を個別に暗記するのではなく、相互の連関や因果関係を意識して理解できているかを重視している。

第2問は、冷戦終結以降の国際社会における政治・経済の動向を題材とし、アメリカ・中国・ロシア・EUをめぐる主要な出来事を扱った。現代史を断片的なニュースとして捉えるのではなく、地域統合やナショナリズムの台頭といった歴史的潮流の中で位置づけ、歴史的視点から理解できているかを問う構成とした。

第3問は、前漢の全盛期から三国時代に至る中国史を通して、政治体制や社会構造の変化を扱った。武帝の対外政策や後漢の衰退を踏まえ、思想史的動向と政治・社会の変動を関連づけて理解しているかを問う構成とし、王朝史を構造的に捉える力を重視している。

第4問は、19世紀のオスマン帝国の動揺からトルコ共和国の成立までを扱い、青年トルコ革命、ムスタファ＝ケマルの改革を中心に出題した。帝国から国民国家への転換に伴う政治・宗教・社会制度の変化を、国際関係の中で理解できているかを問うことを意図している。

※各問題の詳細は、一般選抜前期日程（2月7日実施）の内容を具体例として記載しております。

地理

気候、地誌、エネルギー・資源、地形図の読図と周辺地域の地誌といった広範な分野について、リード文に加えて、地図、図表、地形図などの多様な視覚資料を用いて地理全般の理解度を問うことを意図して出題した。教科書に掲載されている基本～標準レベルの事項を問う設問が大半であるが、地形図の読図では、リード文の理解も含めた総合力を必要とする設問も設定した。

第1問は、気候要素と気候因子について、リード文と地図を用いて出題した。気候要素や気候因子、北極圏、回帰線、熱赤道といった教科書本文中の語句の理解に加え、気温の年較差の特徴についての理解度を問うた。

第2問は、東南アジア地誌について、リード文と貿易統計を用いて出題した。特定の地域を題材として、旧宗主国、マレーシアの民族構成と政策、河川名、貿易など、広範な分野に関する網羅的な理解度を問うた。日ごろから地図や統計資料を積極的に活用しているかが問われる設問とした。

第3問は、石油と天然ガスについて、統計資料を用いつつ、適切な説明文の選択や空欄補充問題など、多

様な形式を通して出題した。教科書レベルの標準的な設問が中心であるが、用語の暗記にとどまらず、化石燃料の産出国・輸出国・輸入国や輸送手段、国際組織などに関する本質的な理解度を問うた。

第4問は、熊本県八代市周辺地域の地誌について、リード文と地形図を用いて、地形、都市、工業、観光など、多様な分野について出題した。地形図の読図など、付け焼き刃の知識では対応できない設問も設定し、地理的技能の総合力を問うた。

※各問題の詳細は、一般選抜前期日程（2月7日実施）の内容を具体例として記載しております。

数 学

本試験は、数学Ⅰ・A・Ⅱ・Bの各分野から、基礎的な計算力と公式の運用力を確認するとともに、条件を整理し筋道を立てて考える力や、複数の分野にまたがる知識を統合して問題を解決する力を評価する構成としている。数学Aは「場合の数と確率」および「図形の性質」、数学Bは「数列」からそれぞれ出題し、高等学校で学ぶ数学の主要な分野を幅広く取り上げている。

第1問は小問集合で、因数分解、分母の有理化、複素数の計算、指数方程式の4問を出題している。多項式の因数分解では式の構造を見抜く力を、分母の有理化では無理数の性質を利用した式変形の技能を問うている。また、複素数のべき乗の計算を通じて虚数単位 i の周期性への理解を確認し、指数方程式では適切な置換により方程式を整理して正確に解く力を評価している。

第2問は集合の要素の個数を問う問題である。共通部分や和集合の個数を求めさせることで、集合の演算に関する基本事項の理解と、条件を正確に整理して場合分けを行う力を見ている。

第3問は三角関数の問題である。余弦の2乗を含む関数について、三角関数の相互関係を用いて正弦による2次関数へと変換させ、定義域に注意しながら最大値と最小値を求めさせている。三角関数の基本的な公式を正しく活用する力と、2次関数の最大・最小の問題に帰着させて処理する力を問うている。

第4問は命題の真偽に関する問題で、三角形の成立条件、相加平均と相乗平均の関係、同じものを含む順列の3題を出題している。この大問を通して、論理的な判断力と数学的根拠に基づく推論の力を評価している。

第5問は指数関数と数列を融合した問題である。指数法則や対数の性質といった基本事項の理解に加え、数列の一般項を求めたあとに和を計算する力、分野を横断して知識を統合する応用力を測る問題である。

第6問は3次関数の極値に関する問題である。微分法の基本的な考え方を正しく理解しているか、また条件を的確に立式し連立方程式を処理する計算力を評価している。

第7問では積分法を取り上げ、3次関数のグラフと x 軸で囲まれた図形の面積を題材としている。グラフと x 軸との交点を求めたうえで定積分により面積を計算し、与えられた面積の値から定数を決定させることで、積分法の基本的な理解と正確な計算力を見ている。

全体として、計算技能に加え、問題文を正確に読み取り条件を整理する力、数学的な筋道を立てて解答に至る力など、多面的な学力を評価できる構成としている。3日程を通じて、数学Ⅰ・A・Ⅱ・Bの各分野から幅広く出題しており、基礎的な知識・技能の定着から分野横断的な応用力まで段階的に学力を測定する内容となっている。

※各問題の詳細は、一般選抜前期日程2月7日実施分の内容を具体例として記載しております。

簿記会計

全体として「簿記」の範囲からは、仕訳問題、精算表作成問題、計算問題等を、「財務会計Ⅰ」の範囲からは、仕訳問題（一部）、語句補充問題を出題している。

第1問は空欄補充式である。出題内容は、「財務会計Ⅰ」の範囲から、企業会計原則の各原則の内容、資産・負債・純資産・収益・費用の定義・分類、損益計算の方法・基準など、多岐に渡っている。

企業会計原則の各原則の理解度、簿記の5要素それぞれの定義・分類の理解度を問う問題である。

第2問は仕訳問題である。「簿記」の範囲から、租税公課、貸倒損失、有価証券、固定資産、預り金等、建設仮勘定のみ「財務会計Ⅰ」の範囲から出題している。

いずれの問題も教科書に掲載している基本的な仕訳内容の理解度を問う内容である。

第3問は精算表作成問題である。決算整理事項は3分法による商品売買損益の計算、貸倒れの見積もり、減価償却、有価証券の評価、現金過不足の処理、費用・収益の繰延・見越しなど10項目で、精算表は8桁精算表で、残高試算表に金額を記入してある。

各決算整理事項の理解度と精算表の作表の力を問う問題である。

第4問は商品有高帳作成問題、計算問題の2問である。

商品有高帳作成は、先入先出法・移動平均法によって払出価額、次月繰越高、売上総利益を求めさせる問題である。計算問題は、個人企業の繰越試算表と期首・期間中の貸借対照表の各項目の金額を基にして、期首の純資産・負債及び期首と期末の売掛金の額を求めさせる問題である。

2問ともに、各項目の基本的内容の理解度を問う内容であるが、計算問題の方は、資料の各項目から期首・期末の貸借対照表を作成する過程で設問の解答を求めるといった総合的な力を問う内容である。

以上、「簿記」の範囲を中心にして、一部「財務会計Ⅰ」の範囲からも出題しており、各項目の定義・分類の理解度、仕訳・決算整理仕訳の力、精算表・商品有高帳作成の力を問う狙いがある。

※各問題の詳細は、一般選抜前期日程（2月7日実施）の内容を具体例として記載しております。